

隠れて生きよ

A—10年後には結社はどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。また、句会等は？

「十年後」の俳壇は傍目には何の変化もないように見えるかもしれないが、内部では自壊が末期的にまで進行しているのではないか。主宰者の権威を中心とした同心円上の集団に閉じた円環構造に、マゾヒスト俳人ならともかく、若者がいつまで耐えられるか。昭和三十年代までは、「俳句の結社は一代限りのもの」が常識だったのに、結社の主宰の世襲—父子相伝、夫婦相伝が慣例となった。茶道生け花など芸事の世界とかわりが無い。「日本の文壇に襲名制度がないだけでもまだましだ」と、山本健吉氏と談笑した時代が懐かしい。「系譜」の作成も困難になろう。「われこそが某を継承、発展させるのだ」と名乗っても、「汝にその力量ありや」と反問されたら終わり。今でも主宰者が同人や会員よりも必ずしも力量があるわけではない。私のように勝手に暫子、三鬼、楸邨、耕衣に私淑し、弟子を僭称する輩もいる。それを不逞というなら、現今の結社の某々は、よく波郷を虚子を



斎藤慎爾
(昭和14年生)

秋桜子を継承しているといえるかどうか。文学は派閥ではない。師の側にいたなどは何の保証にもならない。どこから真の継承者が出現するかわからないというのが、文学の世界。結社の自壊は、力量あるカリスマ俳人がいなくなったことより、「かつての農村的な、あるいはムラ社会的な、一価値社会が成立しなくなっていることと深い繋がりをもっている」(永田和宏)からだろう。

B—10年後には有季定型はどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。また、仮名遣い等は？

「十年後」といわず「百年後」も「有季定型」(というのも妙だが)は不滅であろう。そのことは「花鳥諷詠派」の存命を意味しない。定型が延命してきたのは、定型の力による。別に日本伝統俳句協会の活動あつてのことではない。逆に伝統に背馳しようとしているのが同協会だ。「ホトトギス新歳時記」の編者稲畑汀子は、「序」文で、季題の取捨の方針を虚子の「新歳時記」のそれを踏襲したという。即ち「季題として詩あるものを採り、然らざるものは捨てる。語調の悪いものや感じの悪いもの

の、冗長で作句に不便なものは改め或は捨てる」と。要するに編者の好みで、季語が抹消される。これは仮名遣いを改悪し、「古屋」「鍛冶屋」がなくなったからと、童謡唱歌を貝殻追放した文部官僚に等しい。「古屋」が不可なら、『古今集』『新古今集』も読めなくなる。日本の伝統？ これこそアメリカ流のプラグマチズムの思想に他ならない。

C—10年後には俳壇ジャーナリズムはどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。

総合誌は増える。今の新聞社系のそれは結社誌みたいなものだから、休刊か廃刊に追い込まれるだろう。俳人に阿たり憫喝したりと、「公器」を僭称しているだけに質が悪い。自費出版などやらず、印税を支払ってこそその新聞社出版局ではないか。テレビ俳壇も、電波の無駄との受信料不払い同盟の指摘で終熄しよう。視聴率でいえば、見ているのは出演者と猫とゴキブリだけといわれ

D—10年後に俳壇をリードしているべき俳人十人の、現時点での秀作各一句を挙げてください。ただし、ご自分の直接の師系・同門の人を避けてください。

マスコミで権威的に振舞っていることが、「リードしている」ことにはならない。真に独創的な俳人は常に同時代の価値体系と絶縁して、普遍的な原則に向う。彼ら

を俳壇が歓迎するはずがない。偏屈、難解、異端を理由に疎んじられる。私がオリジナルな内部志向の道標として評価する仁平勝、江里昭彦、筑紫盤井、須藤徹、坪内稔典、林桂、夏石番矢、妹尾健、佐々木六戈、五島高資、中岡毅雄、鳴戸奈葉、樺未知子らは、良い仕事をすることは疑いない。評論ではそうだが、俳句作品となると、さて？ そこで注目したのは以下十名。

ばらばらの日本史は野菊で綴じよ 永末恵子
擁きあふわれら涅槃図よりこぼれ 恩田侑布子
吹きちぎれしは朝顔のまなぶたか 坂本官尾
帝国の梯子しずかに朽ちゆけり 久保純夫
青空の暗きところが雪雀の血 高野ムツオ
桜満開おのが身に皮膚いちまい 辻美奈子
月光やあの手も燃えてしまいきり 対馬康子
狂わねば届かぬ高さ朴の花 高澤晶子
すさまじき日の丸揚がる学府かな 大道寺将司
父の恋翡翠飛んで母の恋 仙田洋子

E—10年後の俳句について総合的に考えること、そして現在ご自分が心掛けていることを記してください。

信条——「お前はお前自身を生きようために隠れて生きよ。お前の時代にとって最重要事と思われるものを知らずに生きよ」(「悦ばしき知識」ニーチエ)

成熟のあとに来るもの

仁平 勝
(昭和24年生)



A 10年後には結社はどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。また、句会等は？

「結社」という言葉は残るでしょうが、その概念は大きく変わっていると思います。もともとわかりやすい変化としては、主宰が今日のように偉くなくなり、師弟関係という伝統的な構造がくずれてきて、弟子はこれまでのように師を尊敬しなくなるからです。「結社」はたんに雑誌を出している俳句クラブのようなものになって、主宰はクラブの部長といった感覚に近くなります。だから数が増えるか減るかといえば、小さな「結社」がいっぱいできるでしょう。そして数が増えれば、必然的に主宰のレベルも低下するわけで、その意味でも主宰は偉くなくなります。二千人以上を擁する大結社はどうなるかといえば、俳句クラブというより宗教団体に近くなります（すでにその傾向があります）。

B 10年後には有季定型はどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。また、仮名遣い等は？

季語や定型の重要性が薄れることはありません。とい

うよりも、その重要性がことさらに問われることはなくあります。季語はどんどん増えていくでしょうが、ちょうどネクタイと同じで、使われないものも増えていきます。ですから、増えることにはなんの意義もありません。むかしからの季語をしっかりと使い込んでいったほうがいいに決まっています。もともと先に述べたように偉くなくなった主宰の多くは、クラブの部員のような弟子から、なぜAは季語でBは季語でないのかと質問されると、うまく答えられないのではないのでしょうか。

仮名遣いに関しても同じことがいえて、もし旧仮名をつかう根拠をきちんと部員弟子たちに説明できないと、若い世代には新仮名のほうが多くなるかもしれません。けれども、それは俳句にとってあまり重要とは思いません。いまだって、なんら本質的な問題ではないのですから。

C 10年後には俳壇ジャーナリズムはどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。

新聞俳壇はけっこう長持ちしそうですが、俳句総合誌

10年後の俳句

はもはや瀕死の状態かもしれません。もちろん俳人がいるかぎり存続するとは思いますが、業界誌のような（つまり結社のニーズによって支えられている）ものになっているという気もします。これは俳人が予想する問題ではなく、採算を度外視しても雑誌を続けたいという俳句好きな人が、出版する側に残っているかどうかでしょう。テレビで俳句を扱う番組は減ると思います。NHK俳壇はなくなっているかもしれませんが、すくなくとも回数には減っているでしょう。これはメディアの変化という問題でもあり、インターネット上の俳句添削などはむしろ盛んになっているような気がします。

ただしそういう状況と関連して、俳句はいまのように専門俳人たちの専売特許ではなくなってくるはずで、そのとき、時代に背を向けた頑固者にならず、同時にまた時代にも迎合しないというスタンスを維持することが、専門俳人の大きな課題になるでしょう。

D 10年後に俳壇をリードしているべき俳人十人の、現時点での秀作各一句を挙げてください。ただし、ご自分の直接の師系・同門の人を避けてください。

熱燭の夫にも捨てし夢あらむ 西村和子
風花す天の粗相のうつくしき 中原道夫
花火の夜兄へもすこし粧へり 正木ゆう子
数ふるははぐくむに似て手毬唄 片山由美子

E 10年後の俳句について総合的に考えること、そして現在、ご自分が心掛けていることを記してください。

ここまでアンケートに求められるまま、十年後という未知の時代について勝手なことを書いてきましたが、ほんとうは俳人にとって十年後の俳句とは、そのとき自分がどんな俳句をつくっているかという問題にほかなりません。今後の十年という時間は、いまと同じように俳句をつくっていれば、そのまま過ぎていってしまうでしょう。だから現役の俳人たちが、今後も自分の好きな俳句を続けていくというだけなら、十年後の俳句は現在のものと大して変わらないはずで、

けれども、わたしたちが認識しておかなければならないのは、今日の俳句はよくも悪くも成熟しきっているということです。だとすればいま成熟しているものは、いったん腐って地に落ちるしかありません。十年後とはつまり、そのあと俳句に何を求めるかという問題にはかなりません。

夏の聞鶴を抱へてゆくごとく 長谷川 權
日盛や漂流物のなかに 楠 夏井いつき
春の山たたいてここへ坐れよと 石田郷子
悉く全集にあり衣被 田中裕明
佐渡ヶ島ほどに布団を離しけり 權 未知子
手をつけて海のつめたき桜かな 岸本尚毅

俳句ビツグバン

A—10年後には結社はどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。また、句会等は？

結社そのものの老齡化による合併・統廃合が促進する。いずれにせよ俳句の組織的恐慌はやってくるだろう。しかし、そこに進化した新結社のごときものが現出する。新結社は超結社で超新星のごときものとなる。そのためには爆発を伴うが、結果固体の星でないようにぬるぬるとした浸透性がある新星になるだろう。ここには、ある程度作品・理論・人の行き来が自由になる。つまり同人や誌友という概念より核(コア)となる会員がいて、そこを取り巻く衛星会員がいて、そこにまた参加する流星のような外部会員が行き来する。コアなる形態は理論的にもコアを形成する。しかし周辺部の理論はコア部と比べると拡散的である。作品や理論哲学はかなり柔軟に浸透性によって他星つまり他結社と行き来できる。つまりここで自分たちの演奏を越えるために他星とのギグが行われる。それが大きくなれば一種、星雲間の飛行ともみえてこよう。この行き来は従来の本という形態を残しながら

がらも、一部ⅠＴに置き換えられよう。本はコアの部分であつてそれを取り巻く周辺たるⅠＴが行き来 of 加速度を強める。

ここでもうひとつの要素は、結社というか超新星に俳句以外の要素が入るかどうかである。それは記号・画像・音声・句い・触覚などの要素だろう。それらが作品を補完するとまことに俳句の命運はあやういが、俳諧の歴史がそれらをくい止めるかどうかは疑問だ。

B—10年後には有季定型はどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。また、仮名遣い等は？

「有季定型」がどうなるかということは、俳句がどうなるかということ。十年やそこらでは「有季定型」の重要性はかわらない。むしろ日本文化としての花鳥そのものの重要性、定型詩としての器の再認識があり重みが増す。もしもそうでないものに置き換えられることは俳句という形態自体がなくなることである。それは人を取り巻く環境の激変等による季節の喪失の時だが、ホーキング等のいうところではあと一、三百年程度はかかる見込

みだ

C—10年後には俳壇ジャーナリズムはどうなるでしょうか、あるいはどうなるべきでしょうか。

俳壇マスコミは「T」関連のあるていどの影響を受けるだろう。つまり双方向性の「プロードバンド」環境によつて、個人のもとにあらゆる端末が常時用意される。そこにおけるものはジャーナリズムというより俳句会の変貌した姿であろうけれども、俳句作品はそこに大衆性・低俗性をもつてより流通することになるだろう。その結果、全般として俳句は墮落しないともいえない。これによつて俳壇ジャーナリズムを必要としない層が現れ、より専門的な俳人と二分化される。しかも九対一以上大きな対比格差が生じるであろう。また年齢層によつては不得意の文字（日本語）からのがれる手段として「A」のような、俳句以外の要素にもたれる可能性もある。いずれにせよ「TVガイド」的な俳壇総合誌や「SWITCH」的なアーティスト系俳句ビジュアル誌の傾向にヘッジしてゆくかもしれない。

D-10年後に俳壇をリードしているべき俳人十人の、現時点での秀作各一句を挙げてください。ただし、ご自分の直接の師系・同門の人を避けてください。

座礁船は鏑の巨花なり雲の峰
ざわざわと白鳥春を汚れたる
寺井谷子 中村和弘



坊城俊樹
(花鳥・ホトトギス／
昭和32年生)

短日のかたまり帰る子どもかな
いたしかたなく風船の糞れけり
たんぽぽやいつもの鶏のゐなくなり
ストーブの炎に身投げせる瞳
岩山の岩押しあへる朧かな
螢死んで牛乳瓶となりにけり
月淡きまま虚子編の歳時記に
綿虫の綿の青さの日暮れくる

小島・健
奥坂まや
今井 聖
權 未知子
小川輕舟
五島高資
筑紫磐井
石田郷子

E-10年後の俳句について総合的に考えること、そして現在ご自分が心掛けていることを記してください。

十年後の俳句も「花鳥諷詠」であることに変わりはないが、現在のようないきなり説明・意味にもたれすぎる作品は少なくなるといふ。日本文化の見直しとともに、やや守旧派的にもなるだろうが、古典・懐古主義はすたれる。近未来の俳句の本質としては、意味性からは遠い花鳥諷詠としていけば放哉のような作品にヒントがあるかもしれない。一種痴呆的な作品にみえるけれども、そこに記号を潜ませるような余韻をもつもの。それはつまり専門俳人にのみ嗜好される果実のものになるだろう。ただしもつと自然礼賛であるべきで、人類が今よりもはるかに小さな存在になるためのメッセージであるべきだ。それ以外の大多数は、大衆的な俳句のようなものがI・Tのもつて氾濫する。